

投資信託の基本の「キ」

「これまで預金でしかお金を貯めてこなかったけれど、もう少し効率的に資産形成をする方法はないかな」というときに、思い浮かぶ金融商品の一つが投資信託です。とはいえ、「興味はあっても仕組みがよく分からない」という人も多いことでしょう。その一方で、「プロが運用しているから」とか「分配金をもらえるから」という理由だけで、大事なお金を振り向けるのは考えもの。どんな商品なのかをきちんと理解し、自分の投資目的とよく擦り合わせて投資を考慮することが大切です。今回は、投資信託の基本の「キ」をお伝えします。

投資信託の仕組みを知ろう

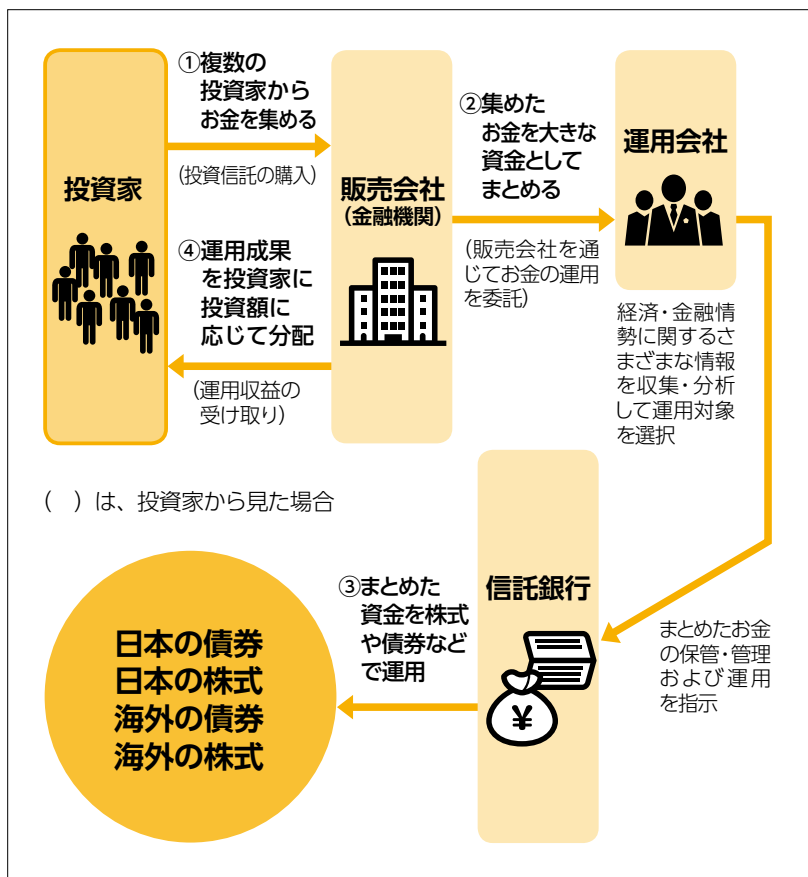
投資信託の商品性を理解するには、まず、その仕組みを知ることが大切です。ポイントは、次の四つです。

- ① 複数の投資家からお金を集める
- ② 集めたお金を大きな資金としてまとめる
- ③ まとめた資金を株式や債券などで運用する
- ④ 運用成果を投資家に投資額に応じて分配する

図表1をご覧ください。①、④は、すべて一つの会社が担当することもできそうですが、投資信託では、投資家から預かったお金をきちんと管理するために、投資家の窓口となる販売会社（証券会社や銀行などの金融機関）、運用会社、信託銀行の三つの会社が分担しています。

これを投資家の側から見ると、投資家は販売会社を通じて資金の運用を運用会社に委託し、その運用成果を販売会社を通じて受け取るということになります。つまり、投資信託に投資するのは、集められたお金を運用して得られる収益を受け取る権利（受益権といいます）を購入するということです。そして、投資家は、

図表1：投資信託の仕組み



【監修】

深野 康彦（ふかの やすひこ）

1962年生まれ。大学卒業後、クレジット会社を経て独立系FP会社に入社。1996年に独立後、2006年に有限会社ファイナンシャルリサーチを設立。さまざまなメディアやセミナーを通じて、資産運用のほか、住宅ローンや生命保険、税金や年金などのお金まわり全般についての相談業務や啓蒙を幅広く行っている。日本経済新聞夕刊「投信番付」のほか連載多数。新聞・マネー雑誌、経済誌などへの執筆・取材協力および金融商品などのデータ提供を行いながら、テレビ、ラジオにも多数出演している。

保有する受益権の数（口数とい
います）に応じて運用による収
益を受け取るのです。

投資信託の メリットとデメリット

投資信託には、次のようなメ
リットとデメリットがあります。

①（一）メリット

① 株式や債券などに 分散投資

投資を行うときには同じよ
うな値動きをする金融商品や
銘柄に資金を集中させるので
はなく、いくつかの性格の異
なる金融商品などに分けてリ
スクを分散（損失の可能性を
小さく）させる「分散投資」
が望ましいと考えられます。
投資信託では、投資家から集
めた資金を株式や債券などさ
まざまな金融商品や銘柄に分
けて運用しますので、投資家
は投資信託商品の中から一つ
を選んで投資するだけで、分
散投資を行うことが可能とな
ります。

② 運用は専門が行う

株式や債券投資には、金
融経済に関する情報の収集・
分析や適切なタイミングで
の売り・買いが必要となりま
すが、これらを素人が行うの
は大変です。投資信託は運用
を専門家に任せるため、仕事
が忙しくて情報収集や分析
に時間を割けないという人
でも効率的に投資すること
ができます。

③ 個人では投資が難しい 投資対象にも投資可能

「今後も成長が期待できる
新興国に投資をしたい」と
思っても、個人ではなかなか
難しいものです。投資信託の
中には、個人による投資が難
しい海外の株式や債券など
に投資するものもあります。

④ 少ない金額から投資できる

投資信託は、1万円程度か
ら購入することができます。
投資信託は、多くの投資家か
ら集めたお金を一つの大き
な資金にまとめて運用する
仕組みですので、少額から投
資できるのが特徴です。

⑤ 透明性がある

投資信託は、取引価格（後
に説明する基準価額）が日々
公表されているため、個別の
投資信託商品の値動きや保有
する商品の価値を把握するこ
とができます。また、監査法
人による監査を受けるなど、
投資家から集めたお金を厳正
に管理しています。

②（二）デメリット

① 投資元本の保証がない

投資信託では、投資家から
集めたお金を株式や債券など
で運用します。株式や債券は
価格変動する金融商品です
から、運用の結果、投資信託
自体で損失が生じることがだ
つてあり得ます。その損失は、
最終的には投資家が負うこと
になります。

② 保有期間中も費用がかかる

株式に投資する場合には、
買うとき、売るときに手数料が
かかりますが、保有している間
はとくに手数料はかかりませ
ん。ところが、投資信託では、購入

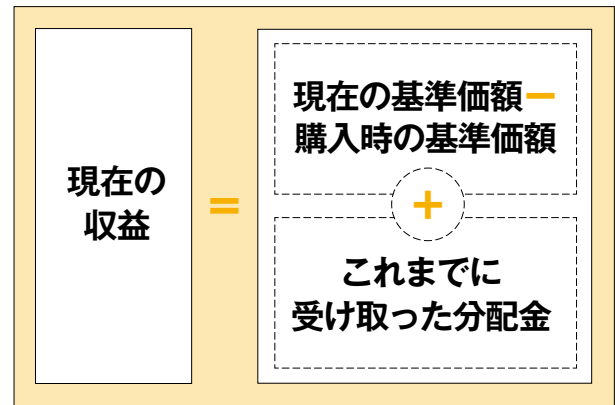
時（一部では解約時）に手
料がかかるほか、保有してい
る間も運用管理費用（信託報
酬）という手数料がかかります。
これは、投資信託がお金
の運用を専門家に任せ、その
ノウハウを活用して収益を上
げようとするものですから、こ
うしたサービスに対する対価
を支払う必要があるのです。

投資信託で得られる 収益とは

投資信託は、定期預金などと
異なり、保有期間が満了したら
「元本＋運用益」が払い戻される
という商品ではありません。収
益を確定させるには投資家が自
らタイミングを見計らって、換
金することになります。それで
は、現在保有している投資信託
の収益はどうやって評価すれば
よいのでしょうか。

保有する投資信託の収益は、
「購入時の価格と換金時の価格の
差金」と「これまでに受け取った
分配金」から構成されます。投
資信託の購入と換金は、日々公表
される「基準価額」に基づいて行
うこととなりますので、現在の収

益状況は次の式で把握できます。



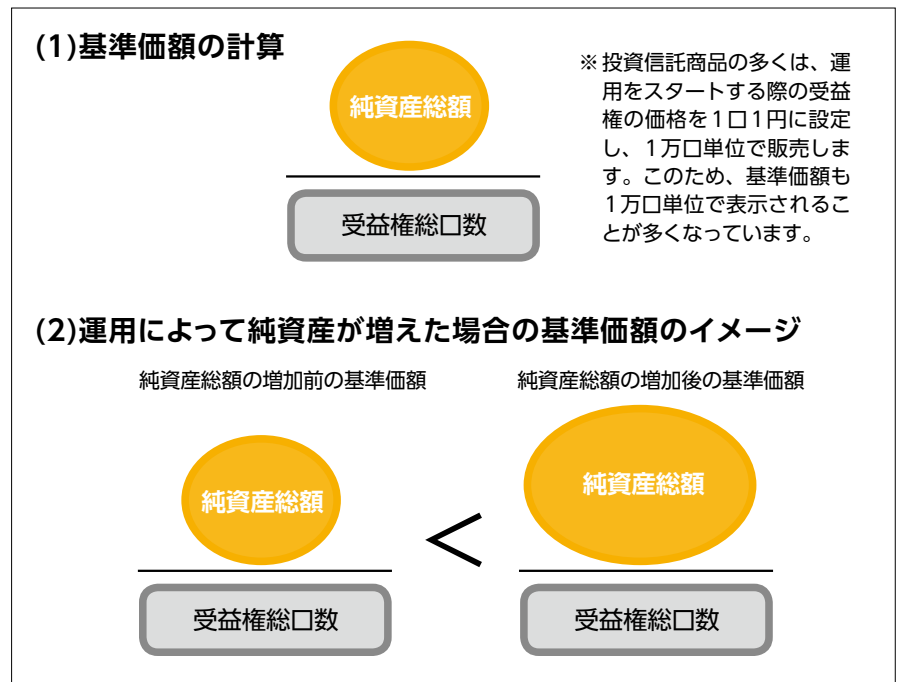
それでは、基準価額とは何でしょうか。投資信託に投資するとは、受益権を購入することだと説明しました。受益権の源泉は、投資信託の財産のうち、投資家に帰属するもの（これを純資産といいます）ですから、受益権1口あたりの価値は「純資産総額÷すべての受益権口数」で求められます（図表2）。基準価額とは、この受益権1口あたりの価値のことで、いわば投資信託の単価を表します。

また、投資信託の中には、運用して得た収益を決算時に「分配金」という形で投資家に支払う

ものがあります。分配金は、投資信託の財産のうち、投資家に帰属するもの（純資産といいました）から支払われますので、分配金の支払いによって、「純資産総額」は減ります（図表3）。したがって、これをすべての受益権口数で割った「基準価額」は下落します。

ところで、投資信託の収益を考えるうえで、先述した費用（手数料）と税金を勘案することを忘れてはいけません。投資信託の購入時・解約時には手数料がかかるほか、分配金や換金して得た利益には税金がかかりますので、最終的な収益は、これらを差し引いて考える必要があります。なお、運用管理費用（信託報酬）は、日々、純資産（投資信託の財産のうち、投資家に帰属するもの）

図表2：基準価額とは

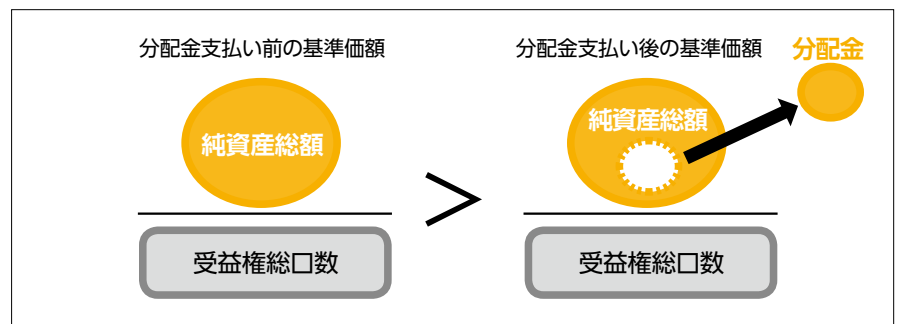


から支払われ、基準価額に反映されていますので、別途費用として考慮する必要はありません。

投資信託の種類

さて、一口に投資信託といっても、現在約5000本もの商品があります。「国内株式イン

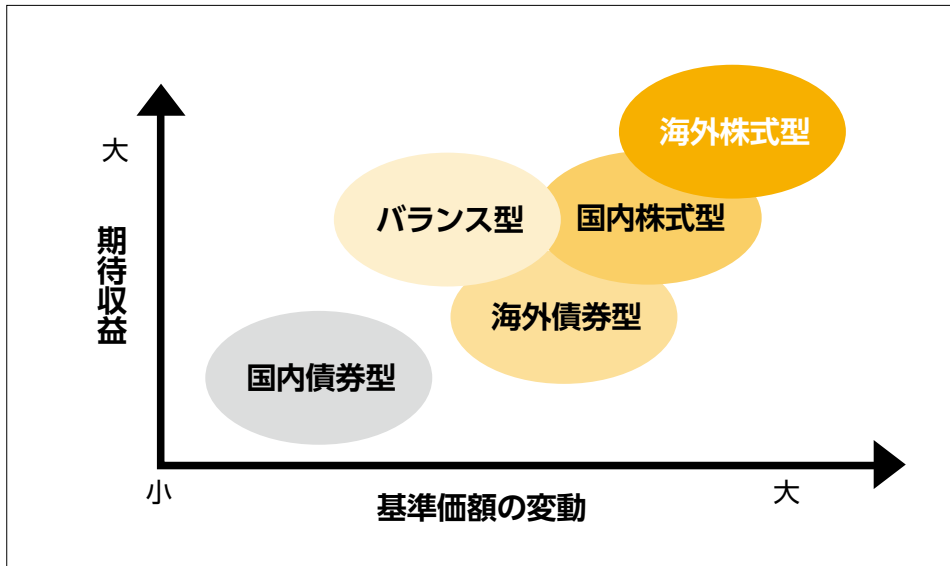
図表3:分配金の支払いと基準価額のイメージ



デックスファンド」とか「海外株式アクティブファンド」など耳慣れない商品名が付いていて、敬遠してしまうという人もいます。

まず、細かな違いはひとまずおいて、(1) 主にどのような資産に投資するか(投資対象)、(2) どのような方法で運用するか(運用の方法)という二つの観点か

図表4：投資対象別にみたリスクと期待収益の関係(イメージ)



ら分類すると、視界がだいぶ開けてきます。

(1) 投資対象による分類

(ア)「主に債券に投資するか、主に株式に投資するか」と(イ)「投資対象地域は国内か海外か」の組み合わせにより、①国内債券型、②海外債券型、③国内株式型、④海外株式型の4通りに

なります。これに加えて、①も④をミックスした⑤バランス型もあります。

債券と株式では株式に投資する方が、国内と海外では海外に投資する方が、値動き(基準価額の変動)が大きくなる(Ⅱリスクが大きくなる)傾向があります(図表4)、バランス型は株式への資産配分割合が高くなるほど、基準価額の変動は大きくなります。

運用スタイル別の分類には、①インデックス運用(パッシブ運用)と②アクティブ運用の2通りがあります。

(2) 運用スタイル別の分類

運用スタイル別の分類には、①インデックス運用(パッシブ運用)と②アクティブ運用の2通りがあります。

①インデックス運用(パッシブ運用)

日経平均株価やNYダウなどの株価指数や債券指数に連動した運用の成果が期待できます。採用した指数に連動した運用を行うだけなので、消極的とみなされパッシブ運用と呼ば

れることもあります。

②アクティブ運用

運用会社が、独自の調査や分析に基づいて投資対象を選び、日経平均株価などの指数の動きから期待できる収益率を上回ることを目指して運用されます。より専門的なノウハウを駆使して運用を行うため、インデックス運用より運用管理費用(信託報酬)が高くなるのが通例です。

投資信託の商品名は、(1)と(2)を組み合わせ用いられることも多く、例えば、国内株式インデックスファンドとは、(1)の投資対象は国内株式型で、(2)の運用方法はインデックス型であることを表します。

さらに、国内株式型であれば、どのような株式に投資をするのか、海外型であれば、どのような国に投資をするのかといった観点を加えていけば、個別の商品の内容をよりくわしく理解することができるよう。

ライフプランに応じた選び方

子どもの進学やマイホーム購入、老後の生活資金など、将来のライフイベントに必要なポイント

お金を準備するために投資信託への投資を考えている人にとって、商品選びのポイントは何でしょうか。

まず大切なのは、お金を準備しようと考えているライフイベントが①近いうちに予定されているか、②しばらく先(目安として5年後以降)に予定されているのか(例えば、子どもが生まれて、大学進学のための資金を準備するなど)に分けて考えてみることです。

①の場合は、目先確保したいお金の目標額がはっきりしていますので、比較的风险の小さい(基準価額の変動の小さい)国内債券型を中心に運用することが考えられます。一方、②の場合には、時間があるため、ある程度リスクの大きい(基準価額の変動の大きい)商品を組み入れることが考えられます。もちろん、②の場合でもライフイベントが近づいてきたら、必要なお金の額と投資信託を換金した場合の額とを比べながら、どこかのタイミングで投資する商品を見直し、安全性の高い商品に切り替えていくことも必要でしょう。

さらに、分配金をどのように受け取るのかも重要なポイント

です。当面受け取らなくても生活に困らないという人もいれば、毎月のおこづかいとして受け取りたいという人もいます。ただ、分配金の額が大きく、支払頻度の高い商品への投資は、投資期間が長くなるほど、効率的ではありません。先に説明した通り、分配金は投資信託の財産のうち投資家に帰属する部分から支払われるため、分配金を支払うと、投資信託の中で投資に充てられる資金が減ってしまいます。一方で、支払われた分配金を投資家がほかの投資信託商品の投資に回すとしても、分配金には受け取りの都度、課税されますので、投資資金は課税された分目減りしてしまうことになるのです。

購入後のフォロワーの仕方

ライフプランに応じた商品選びを行ったとしても、購入時に思い描いたストーリー通りに物事が展開するとは限りません。預けたお金の運用は専門家に任せるとして、その運用が上手くいっているかどうか、期待通りに収益を上げられているかと

図表5：基準価額の見方

●●新聞 10月6日(木)

朝刊に前日の基準価額が掲載される

オープン投信

10月5日(水)

ファンド	基準価額	前日比	ファンド	基準価額	前日比
ファンドA	17,002	▲30	ファンドE	9,701	▲50
ファンドB	9,800	△20	ファンドF	16,629	△70
ファンドC	33,670	△3	ファンドG	7,334	▲4
ファンドD	5,574	▲1	ファンドH	10,200	▲1

投資信託の名前(銘柄)

この例では10月5日の基準価額(単位は円)

前日と比べて上昇していれば数字の前に△が、下落していれば数字の前に▲が付く

いった購入後のフォロワーは自身で行う必要があります。では、いったい、何をすればよいのでしょうか。

まず、基準価額を定期的に確認することです。基準価額は、主な日刊紙に掲載されるほか投資信託協会のホームページでも公表されています(図表5)。「現在の基準価額」購入時の基準

価額」を計算することによって、収益をおおむね把握することができます(正確には、分配金受取額や費用、税金を勘案しなければなりません)。

この結果、想定とかけ離れて収益が上げられていないならば、その理由を調べましょう。その手がかりとなるのが、運用会社によって発行される運用報告書(決算期ごとに発行)や各種のレポートなどです。

運用報告書では、対象期間における投資環境についての説明や今後の運用方針などが記載されていますので、自分が委託した運用会社が、現状をどのように考えているのかを知ることができません。

基準価額が下がったからといって、いたずらに慌てるのではなく、購入当初の見通しや投資目的をももう一度振り返って、このまま投資を続

けるのか、ほかの商品に切り替えるのかなど今後の対応を考えることが大切です。そのためにも、行き当たりばったりで投資を始めるのではなく、購入時に情報収集を行って、しっかりとした方針を持って投資に臨むことが重要です。

まとめ

投資信託は1万円程度から始められるため、まとまったお金を持たない人でも、比較的簡単に投資を始められる金融商品です。「投資」ですから、増えることもあれば減ることもありまます。ただ、毎月少しずつでもコツコツ積み立てを続けることは資産形成を行ううえで必要不可欠です。投資信託は、一定のリスク分散が図られた商品ですから、投資の入り口としては格好の金融商品といえるでしょう。

これまで説明した内容は、投資信託についてのごく基本的なことばかりですが、ここで得た知識を土台にして、自分でいろいろと情報を収集し、自分のライフプランに合った投資を考えたいと思います。